

岡倉天心生誕150周年・没後100周年記念

6月15日の大倉山講演会

天心の中の日本と西洋

横浜で幼少から英語を学んだ天心は、卓越した英語力で欧米はもとより、インドの詩人タゴールをはじめアジアの人々とも親交を結びました。日本に急激な西洋化、近代化の波が押し寄せた明治の時代に天心は、欧米至上主義とは一線を画し、日本に固有の文化を大切にする感覚を一貫して保持していました。たとえば天心の英文著作『茶の本』にも、西洋と東洋は互いに相手の優れたところを学びあうことが大切だという天心の文化観が明瞭に表現されています。こうした天心の意識は、今日のことばでいえば極めて多文化主義的です。西洋と東洋の両方に開かれた天心の文化観を、天心と英語との出会い、フェノロサやラフカディオ・ハーン、タゴールとの出会いなどにも触れながら探っていきます。

◇日時：平成25年6月15日（土）午後2時～3時30分（開場は午後1時40分）

◇会場：横浜市大倉山記念館 ホール

横浜市港北区大倉山二丁目10-1 大倉山公園内（東急東横線大倉山駅下車徒歩7分）

◇講師：小林亜紀子（早稲田大学非常勤講師）

◇定員：80名（入場無料、予約なし当日先着順）

◇問合せ：大倉精神文化研究所 電話 045-834-6637

Eメール okuraseishinbunka@js6.so-net.ne.jp

ホームページ <http://www.okuraken.or.jp/>



今後の講演会予告

公開講演会「中国北方における水不足と農業」講師：馬場毅（愛知大学現代中国学部教授）

日時：7月13日（土）14時00～15時30分（開場13時40分）会場：横浜市大倉山記念館ホール

岡倉天心生誕150周年・没後100周年記念講演会

「シャーロック・ホームズを原書で楽しんだ岡倉天心」

日時：9月25日（水）14時00～16時30分 会場：横浜市中央図書館地下1階ホール

主催：大倉精神文化研究所 共催：横浜市大倉山記念館

協力：「天心サミット in 横浜」実行委員会

天心の中の日本と西洋(小林亜紀子)



多文化主義者としての天心

～日本に急激な西洋化、近代化の波が押し寄せた明治期～

- 決して西洋一辺倒の波に飲み込まれず、
かといって単純な反西洋的排外主義を標榜するのでもない
- 西洋と東洋の両方に開かれた文化意識
　　1 欧米ばかりでなく中国やインドを自らの足で訪れた。
　　西洋と東洋の分け隔てなく、広く様々な人々と交わる。
- 卓越した英語力
　　→日本人としてのアイデンティティを自己表現
　　→ 英語による執筆活動や講演活動
- 西洋と東洋は優劣の関係にはない
　　→互いに相手の優れたところに学び合う
　　対等で双方向的な関係であってよい。

3

「アジアは一つ」？

- 「天心」に対するレッテル
　　→「国粹主義者」「危険な思想家」
- “Asia is one.”
　　The Ideals of the East-with special reference to the art of Japan (『東洋の理想』) 1903年、ジョン・マレー社(ロンドン)
- 翻訳され、本来の文脈から切り離された「アジアは一つ」
- Kakuzoによる“Asia is one.”の本来の文脈とは?
　　→地理的、政治的な表現ではない。美術史。

4

天心の中の日本と西洋(小林亜紀子)

“Asia is one”は 出版当時、海外ではどう読まれたか？

- Kakasu Okakura, *The Ideals of the East: with special reference to the art of Japan*, London : J. Murray, 1903.
⇒邦訳が出るのは、天心亡き後の1922(大正11)年
しかも全訳ではなく抄訳『天心先生歐文著書抄訳』
- 出版当時の英米における書評
 - *The Times Literary Supplement*, London, March 6, 1903.
(『タイムス』紙文芸付録)
 - *The Athenaeum*, London, March 21, 1903.
(『ザ アセニアム』)
 - *The Outlook*, New York, April 9, 1904. (『ザ アウトルック』)
 - *The Dial*, Chicago, January, 1905. (『ザ ダイヤル』) など

(坂岡弥寿子『岡倉天心考』吉川弘文館、1982年より)

5

The Times Literary Supplement, London, March 6, 1903. (『タイムス』紙文芸付録)

- 「この小著は極東藝術の背後にあるものを歐州人に説明するものであり、それを内側から書いたものである。従来、藝術は、余りにもしばしば魅力ある孤立した現象として扱われすぎ、その現象を説明しようとするものは誰もいなかった。繊細な花に魅せられて、我々は、それがどの種子から育ったか、あるいはどの木に咲くのか、たずねようともしなかった。」
- 「アジアは一つである」。彼はこの言葉をもって広大なテーマを始めている。インド、中国、日本は一つの共通した有機体をわけあつてゐる。もしアジア文化の宝物を調べたいなら、『相次いで寄せてきた東洋思想の波が砂浜にあとを残してゐる海辺、日本に行くべきである。』

(坂岡弥寿子『岡倉天心考』吉川弘文館、1982年より)

6

Kakuzoの考える“Asia is one”とは？

- 日本の美の歴史をいかに位置づけ、理解するか
→日本の美の歴史は、アジアから分離したものとしてはありえない。源流であるインド、中国をはじめとする“Asia”とのつながりを視野に入れ、そこから日本に至る全体の流れの中で捉えられるもの。
中国、インドの奥地にまで足を運んだ天心の実感に基づく。
- 世界のひろがりの中で、日本を捉えようとする視点
→他のアジア諸国に対する日本の優越を説くのとは正反対の姿勢。
- 国粹主義でも、西洋一辺倒でもない、独自のスタンス

7

天心再評価の機運

- 東京芸術大学創立120周年
「岡倉天心展記念シンポジウム」開催
(2007年10月5日)
 - 東京芸術大学名誉教授 上野浩道氏
→1960年代を振り返って
「岡倉天心はひじょうに国粹主義的、あるいはナショナリスティックな、危険な思想家ということで、それを研究テーマに扱うことはなかなか難しいこと」
 - 宮田亮平学長
→いま改めてなぜ天心かについて
「天心をきちんと様を正して扱うことがなく、時が過ぎ」たが、「広く大きく、遠く確かな視野とヴィジョンを示した天心の存在は、まさしく現在的なテーマにも重なる」



8

天心の中の日本と西洋(小林亜紀子)

バランスのとれた異文化感覚の原点

- 横浜で育ち、幼児から外国人を見なれている
→「外国人=異質な人間」ではなく、「外国人=ことばや文化は違っても同じ一個人間」
※理屈では説明の難しい子供なりの異文化感覚が自然に身についていたのではないか。
⇒広い世界の中で日本を相対化して眺める視点

- 英語学習に有利な特殊な環境で育つ
6~7歳頃から宣教師ジェイムズ・バーの私塾で英語を学び始める →抜群の英語力
⇒急速な外国語習得の母語への影響
→長延寺で漢学の手ほどきを受けはじめる
※幼少期に英語や西洋文化に日常的に晒される経験が日本語や日本文化への自覚を促す契機に



宣教師バー

9

天心の英文著作と同時代人たち

日本人が英文で執筆し、日本、日本人を直接世界に紹介する試み
岡倉覚三 1862(文久2)-1913(大正2)

- *The Ideals of the* (『東洋の理想』) 1903(明治36)年
- *The Awakening of Japan* (『日本の目覚め』) 1904(明治37)年
- *The Book of Tea* (『茶の本』) 1906(明治39)年

新渡戸稻造 1862(文久2)-1933(昭和8)

- *Bushido: The Soul of Japan* (『武士道』) 1900(明治33)年

内村鑑三 1861(万延2)-1930(昭和5)

- *Japan and Japanese* (『日本及び日本人』) 1894年、
How I became A Christian (『余は如何にして基督信徒となりし乎』)
1895(明治28)年

10

英文著作を発表した天心の同時代人(1)
新渡戸稻造 1862(文久2)-1933(昭和8)



写真左は
メアリー夫人

- *Bushido: The Soul of Japan* 『武士道』
⇒1900年にフィラデルフィアで出版される。
- 札幌農学校の二期生。在学中にキリスト教徒に。
- 帝国大学に進学するが中途退学
⇒その後、アメリカ(私費)とドイツ(官費)へ留学

11

英文著作を発表した天心の同時代人(2)
内村鑑三 1861(万延2)- 1930(昭和5)



- *Japan and Japanese*(1894) 『日本及び日本人』
⇒ *Representative Men of Japan* 『代表的日本人』
に改訂され、広く読まれる
- 札幌農学校の二期生。在学中にキリスト教徒に
- 1884年私費で渡米後、アマースト大学で学ぶ
(キリスト教の聖職者養成を主目的とした大学)

12

天心の中の日本と西洋(小林亜紀子)

英文著作発表当時の天心と新渡戸・内村の比較

〈共通点〉

- 徹底した英語教育
- 明治期に海外体験
- 英語で著作を執筆
→欧米で発表し
各国で広く読まれる

〈相違点〉

- 大学留学経験
新渡戸・内村 →歐米
天心 →大学留学しない
- 渡航先
新渡戸・内村 →歐米
天心 →歐米、中国、インド
- 宗教
渡戸・内村 →キリスト教徒
天心 →仏教徒
- 服装 天心 →海外でも和服
- 外国人への意識
内村は外国人嫌い

13

アメリカでの天心と和服



ボストン美術館
中庭にて
1905年頃



マサチューセッツ州
下院議員アンドリュー邸庭内にて
1910年



ボストンにて
明治40年代
(1907～1912年
頃)

14

明治20年頃までの写真



大學畢業～文部省圖書編



洋裝
24 頁



欧洲视察旅行(右端が天心とされる) 1886(明治19)～1887(明治20)年

15



木下長宏「國會天心」にアルヴァ畫面、2005年より

16

洋行では羽織・袴の天心

- 洋行では羽織・袴を着用

「彼は英京の大通にも、伊太利の廃墟にも、三ツ葉藤の五ツ紋の羽織を颯爽と翻していた。」

(岡倉一雄『父天心』より)

- 英語が流暢ならなおさら外国では和服を着用すべき

『おいらは第一回の洋行の時から、殆んど欧米を和服で通っている。お前達もせめて英語が滑らかに喋れる自信がついたならば、海外の旅行に日本服を用いた方がいいことを教えて置く。』(岡倉一雄『父天心』より)

17

インドでの和服着用の様子

- スレンドラナート・タゴール
「天心回想録」1936年

「彼に対する私の第一印象は未だにはっきりしている。女主人に席を勧められたのは、簡単な五弁の白い花の家紋を染めぬいたか刺しゅうしたかした黒の絹のキモノを来た、中背のがっちりした体躯の人だった。手には、墨で小枝の絵が書いてある竹と紙で出来た扇子を持ち、足袋にぞうりをはいていた。」

18

1904年セントルイス万博での講演の様子



「日本固有の服装で演壇に現われ、頗る流暢な英語で、大胆かつ率直に、この興味ある問題を解剖し去った」天心は「俄然人気の中心となってしまった」
「天心が白皙人伍して堂々活歩する風貌」
(『父天心』より)

2冊目の著作発表に際してジャーナリストの撮影に応じて 1904年末

19

天心とともにアメリカを訪れた 横山大観・菱田春草・六角紫水の一行を紹介する 1904年3月20日付『ニューヨーク・タイムズ』紙記事



「大観も春草も共に天心のなせる所に倣って洋装を避け、白羽二重の半衿を着けた襦袢を下に、上には黒紬の紋服に羽織、袴着用、足は紺足袋に白木綿の鼻緒の雪駄という純日本の礼装を以て堂々と押出して米国の土を踏んだ」
(大観の伝記より)

20

天心にとっての和服着用の意味とは？

- 英語が流暢な天心にとっては、自己の文化的アイデンティティを即座に相手に伝える最も効果的な方法だったのではないか？

➢ イギリス人言語学者デイヴィッド・クリスタル

「世界の舞台で自分がどの国の出身かを周囲に知らせたい場合、常に身に付けていたという点で最も便利で、一番直接的で時間のかからない方法は、独特な土地の訛りで喋ることである」

⇒しかし、天心の英語は

「物陰で聞くと、その語調は、白人とまがうばかりであった。会話に至つては英語の発音の泰斗といわれていた叔父の由三郎よりも遥かに上手のように感じられた」(岡倉一雄『父天心』より)

⇒和服着用によるアイデンティティ明確化



21

天心の考える 日本人の西洋文明受容のありかたとは？

- 「おいらは第一回の洋行の時から、殆んど欧米を和服で通っている。…しかし、破調(ブローケン)の語学で和服を着て歩くことは、甚だ賛成し難い。」(岡倉一雄『父天心』より)

⇒欧米文化優越意識を持つ西洋人からは、中途半端な英語で和服を着て歩く日本人は、嘲笑の対象とはなりえても、一目置かれる存在とはなりえないことを、天心は了解していただろう

- 英語=洋才(西洋の文化文明の受容)

和服=和魂(日本固有の文化価値を見失わない)

- 英語を流暢に話していても、自分はあくまでも日本人である

⇒西洋の基準で一方的に文化序列化されることへの拒否

22

フェノロサ、ハーンとの幸運な出会い

- 天心の西洋と東洋の両方に開かれた意識
=西洋と東洋の関係を優劣では捉えない意識
⇒なぜ天心はそうした意識を明瞭な形で持ちえたのか？
- フェノロサ、ハーンという二人の日本の伝統や文化を深く愛し、
その固有の価値を理解する西洋人との出会いの意義
⇒「東洋の文化は西洋の文化に比べて劣っている」
という近代西洋中心主義の見方を退ける
⇒日本という枠組みを超えた、広い外からの視点で
日本の文化や伝統を眺める、客観性、相対性

23

天心とフェノロサの出会い

アーネスト・F・フェノロサ
(1853年2月18日 - 1908年9月21日)



- 政府雇アメリカ人として
1878(明治11)年に来日。当時25歳。
→東京大学で政治学、経済学、社会学、哲学など講義。
(明治19年まで)
- 天心はフェノロサの東京大学での教え子
- フェノロサは天心に、日本に固有の美術文化遺産の
芸術的文化的な素晴らしさを教える

24

天心とフェノロサ(その1)

- 明治10年4月 東京大学(開成学校から改称)に編入
⇒大学3年在学中、抜群の英語力を買われて、フェノロサの日本の古美術収集や研究の手伝いと手伝いを頼まれる。
フェノロサ7000点→のちにボストン美術館の所蔵になる
(モース2000点 ピゲロー2万点、国宝級、重要文化財級)
- 明治13年7月 東京大学卒業、文部省音楽取調係に
⇒文部省時代にも天心はフェノロサと行動を共にし、廢仏毀釈で多くの国宝級の仏像が破壊され、薪にされるのを目の当たりにする。
- 明治16・17年頃～ 全国の古社寺調査が本格化
⇒二人は日本の伝統美術保護を政府に働きかける

25

天心とフェノロサ(その2)

- 明治17年 京阪地方の古社寺名宝調査
⇒法隆寺夢殿を開闢
秘仏救世観音を拝する
「實に一生の最快事なり」
(東京美術学校の美術史講義)
- フェノロサ、三井寺の桜井敬徳阿闍梨の導きで仏門に入る
- 明治19年10月 天心とフェノロサは
歐州美術取調のための歐州視察旅行へ
(ニューヨークを経て、半年のヨーロッパ滞在)
- 明治20年 帰国後、東京美術学校の開校準備に取り掛かる



26

天心とフェノロサ(その3)

- フェノロサは1890(明治23)年、帰国
⇒ボストン美術館に新設された
日本美術部初代部長就任
- 1895年12月メアリー・マクニール(美術館助手)と再婚
1896年4月 ボストン美術館から無期休職の通告⇒辞職
- 1896年7月6日～11月6日 2度目の日本滞在
『フェノロサ夫人の日本日記』
- ⇒「アーネストお気に入りの」岡倉
「私たちのために誠心誠意尽力してくれる
真の友人」



27

ラフカディオ・ハーン、小泉八雲、Lafcadio Hearn 1850(嘉永3)-1904(明治37)



1850年ギリシアで生まれる
1852年アイルランドへ(⇒フランス⇒)
1875年、アメリカ(シンシナティ、
ニューオーリンズ)
1890(明治23)年、横浜港へ。
1890年～松江
1891年～熊本
1894年～神戸
1896年～帝国大学文科大学講師
1903年1月15日付解雇通知
3月19日最後の講義
1904年2月～早稲田大学文学科講師
1904年9月26日 心臓発作で亡くなる

28

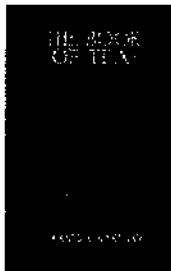
天心のハーン評価(その1)

- *The Book of Tea* (『茶の本』, 1906年)

ハーンに言及

"It is rarely that the chivalrous pen of Lafcadio Hearn or that of the author of "The Web of Indian Life" enlivens the Oriental darkness with the torch of our own sentiments."

「ラフカディオ・ヘルンの義侠心あるペンとか、『インド生活の仕組み』の著者がアジア自身の感情の松明で東洋の暗黒を生き生きと照らしているのは、まれな例」



- 「『インド生活の仕組み』の著者」=ニヴェティ(Nivedita)

- *The Ideal of the East* (『東洋の理想』)の序文の寄稿者
- 英文原稿に朱筆を入れ、出版社との構渡しを手伝う

29

天心のハーン評価(その2)

- 『ニューヨーク・タイムズ』紙に対する天心の英文の抗議文

➢ 1906年11月3日付同紙に掲載された抗議文の見出し

"IN DEFENSE OF LAFCADIO HEARN. Mr. Okakura-Kakuzo Gives Us an Authoritative Japanese Opinion of the Self-Exiled American Writer."

➢ 「すべての外国の著作家の中で、彼がわれわれ日本人のこころにもっとも近いところに来ていた(of all foreign authors he has reached nearest the heart of our people)」

➢ 投書の結び "OKAKURA-KAKUZO. Tokyo, October, 1906."

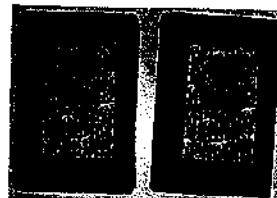
IN DEFENSE OF LAFCADIO HEARN.

Mr. Okakura-Kakuzo Gives Us an Authoritative Japanese Opinion of the
Self-Exiled American Writer.

30

天心がハーンに言及する『茶の本』(1906)以前に
発表されたハーンの日本に関する著作

- *Glimpses of Unfamiliar Japan*『知られざる日本の面影』1894
- *Out of the East*『東の國より』1895年
- *Kokoro*『心』1896年
- *Gleanings in Buddha-Fields*『仏陀の國の落穂』1897年
- *Exotics and Retrospectives*『異国風物と回想』1898年
- *In Ghostly Japan*『靈の日本にて』1899年
- *Shadowings*『影』1900年
- *A Japanese Miscellany*『日本雑錄』1901年
- *Kotto*『骨董』1902
- *kwaidan*『怪談』1904
- *Japan: An Attempt at Interpretation*『日本—一つの解明』1904年
- *The Romance of the Milky Way and other studies and stories*『天の河綺譚その他』1905年



31

天心・フェノロサ・ハーン



➤ 天心とフェノロサとの関係

⇒フェノロサ学会での研究成果などを通して詳細な事柄を含めて比較的わかっていることが多い

➤ 天心とハーンとの関係

⇒実はよくわかっていない部分のほうが多い
？二人の直接的な出会いの機会は？



天心がハーンについて論じている二つの文章

⇒天心はハーンの著作を読み、影響を受ける
ハーンに対する尊敬や高い評価。



➤ フェノロサとハーンの関係

⇒深い親交。互いの家を訪問しあう。

32

天心の中の日本と西洋(小林亜紀子)

天心とタゴール

- ラビンドラナート・タゴール(詩人タゴール)1861~1941年
· 15人の兄弟の中で14番目



➤ 最初の出会い

- =天心第一回インド訪問
1901年12月~1902年10月タゴール家滞在
※天心は日記を残していないので、詳細不明
→二人の交流を知る手がかり
·堀至徳の日本語日記
·スレンドラナート・タゴール「天心回想録」(検閲?)
(ラビンドラナートの2番目の兄の長男)

➤ 再会

- =ボストンに滞在中の天心をタゴールが訪問 1913年

33

タゴールの講演に探る天心とタゴール(1)

- インドでの天心とタゴールとの交流を具体的に知る上で、天心に同行した仏教僧、堀至徳の日記やスレンドラナート・タゴールが残した資料は限られた有益な手掛かり。
⇒しかし、タゴールが直接天心とのことを語っているという点において、このタゴール講演は特別な意味を帯びる。
- ラビンドラナート・タゴール(1929年6月7日日印協会講演会)
「幾年か前のことです。わたしは日本の国から来た一人の偉大な独創的な人物に接したときに、眞の日本に出会いました。この人は長い間わたしの客となり、そのころのベンガルの若い世代に測り知れない靈感を与えました。」
(「東洋文化と日本の使命」「タゴール著作集第八巻」)
※「日本の国から来た一人の偉大な独創的な人物」=天心

34

タゴールの講演に探る天心とタゴール(2)

➤ 1913年2月3日～19日
ラビンドラナート・タゴールはボストンに天心を訪ねる

➤ ボストンでのタゴールと天心

「わたしはアメリアで彼がボストン美術館の東洋部の主事をしていた時に、再び彼にめぐり会う好運を得ました。わたしはそこでも、彼が彼と交渉を持ったボストンの教養あるアメリカ人の間に、どんなに深い感歎の情を引き起こしているかを見たのであります。これがわたしどもが会った最後になつたのですが、この時すでに彼の病気はほとんど致命的になっていて、故郷へ帰るつもりでいたようです。」
(1929年6月7日 日印協会講演会にて)

35

タゴールの目に映った天心の中国観・インド観

➤ 1929年6月7日 日印協会講演会

「彼はわたしに中国を訪れるすることをすすめ、…中国に対しても抱いていた非常に深い尊敬の念を表わしました。このことがまたも、彼の偉大な人格をわたしに啓示したのであります。インドに対する彼の深い同情の念は、わたしどもを非常に感動させたのですが、この時わたしはそれがその限界において、何ら特別なものではなく、彼の理解の深さ、大らかな人間的な共感の現われの一つに過ぎないことを知ったのであります。あなたがたの国の人々がしばしば充分な同情と感謝を欠いておられるこの隣国に対して、彼がほとんど尊敬の念をもつていることを知って、わたしはますます彼に対する尊敬を深めたのであります。」

(「東洋文化と日本の使命」『タゴール著作集第八巻』)

36

タゴールと天心～響きあい、信頼しあう関係

➤ 1929年6月7日 日印協会講演会

「わたしども自身の属していない民族の中のすべての偉大なものに対して、わたしどもはしばしば、狭いけちくさい偏見によって、見る眼を曇らされてしまうのですが、彼はそんなことからはるかに超越しておりました。彼によれば、中国は無限の可能性をもつ偉大な国であり、その過去の歴史の示す天才は、その国内のあらゆる所に無数に散在する記念物を残し、今もなお民族の心に生き続けていると言うのです。…今日、比較的目立たぬように生き続けるこの民族…に対する彼の賛嘆の言葉を聞いて、わたしは心から彼を信じることができた」

(「東洋文化と日本の使命」『タゴール著作集第八巻』)

37

再び、タゴールを通してみえてくる 天心の“Asia is One”

➤ アジアはどのように“One”なのか？

また、なぜ“One”なのか？

→タゴールの語る天心のアジア観・文化観に
これを考えるまでのひとつの手掛かりがある

➤ 天心の考えた“Asia is One”とは？

⇒各民族や地域の、豊かな文化的多様性を内包するアジア、
個々の文化が多様性を保ちながらも共通の文明、芸術、精神を共有するアジア、そういうものとしての“Asia is One”
すなわち、「ひとつのアジア」

※仮に、天心が、「日本を東洋の盟主とするアジアの政治的統一」の
ようなものを構想していたならば、天心とタゴールの友情もはじめ
から生まれるべくもなかったのではないか。

38